

る大河川地域はないのであるから。

しかし、これらの水害を手をこまねいて見ている必要はない。ではどうすればよいか。ダム建設に当っては発電も必要であるが、洪水調節も出来るようなダムが作られなければならない。さらに、河川の本流の水害対策は、よくやられている方だが、これに付加えてその支流の整備も十分に行なわれなければならない。

さて、ここで、水の水質に目を向けてみよう。言うまでもなく、新聞、テレビその他で報道されているようにその汚染の状態は驚くばかりである。南極のペンギンの羽にさえPCBが検出されている。また、私たちの一番身近かな霞ヶ浦は、急加速度的に汚染され、まさに死の直前である。

長野県の諏訪湖は、明治四十二年には北海道の支笏湖の水質に匹敵していたが、現在はどうであろうか。精密光学機械工業が発達し、東洋のスイスとまで言われているが、諏訪湖は今やアオコの大発生や、重金属汚染によってまさに死の海となった。これほど急速に老いた湖は他に例がない。

いくら存在していても、それが汚染されている、あっても無きが如しである。

このように汚れきってしまった背景には、経済至上主

義、科学万能の考え方があった。利潤増大を最高目的とし、利潤追求のためならば多少の犠牲はやむを得ない。そのために、科学技術はその力を十分に発揮し工業の発達につくしたのであった。そして、ここから生まれたのが誤った科学万能の考えである。

科学者は、生産の助けはできても後しまつは出来なかつたのである。それは現実をみればはっきりとわかるだろう。工場から生産されたものは確かに立派なものである。が、その影に残されたものはどうであろう。それらはみな自然という環境の中に捨てられ、自然の生態系を壊して徐々にそして確実に私たちをむしばんでいるのである。この実例は、毎日のように新聞紙上をにぎわしてきた。

これらの環境汚染犯、あるいは助長者を確実に証明するのはむずかしいが推測するのは容易である。彼らは発生した症状とその原因との因果関係の複雑さをよいことに、その容疑を否認し続けてきたのである。

生活必需品である水が汚され、あるいは私たちがみずから汚してきたことは明らかである。それが過失であろうと無意識であろうと。水は石油、石炭とは異なり使用後も多くの場合は自然へ還元される。水を資源とい